

ハリー・ポッターと愛 の守護霊

征マル

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

『愛』

——かつて、闇の帝王の配下に置かされ、唯一、闇の帝王に愛された人間。いや、人と言うにはあまりにも彼女は不思議すぎた。

ともあれ、闇の帝王は、暴力を『愛』と取り、彼女を激しく傷付けた。

それを見兼ねた、セルブス・スネイプは殺されるのを覚悟で彼女を逃がした。

あの、ホグワーツ城へ。

——そして彼女は、英雄ハリーポッターと共に同じ学舎で学んでいる。

闇の帝王に愛され、ハリーポッターに愛され。

闇に愛され光にも愛された少女。

『愛』の実体化——いや、愛の守護霊だ。

闇の帝王、ハリーへの予言。

そして、『愛』の守護霊の謎は絡み合い、複雑になっていく。

光も、闇も、『愛』を渴望し、『愛』を望んでいた。

銀髪の彼女は何を思うのだろうか。

銀髪の彼女は何者なんだろうか。

彼女を軸に、物語は廻っていく——

目次

プログラグ

1

プロローグ

「おはよう、メイレー。」

心地の良い声が鼓膜を響かせる。

彼女はゆつくりと瞼を開いた。

「おお、起きたの。メイレー。」

光沢のある絹のローブを何重にも重ね着している老人がいた。

長く伸ばされた白い髭は、彼の容姿にあつた偉大さを醸し出している。

「こうして話をするのは初めてじゃ。ほっほっほっ」

マグカップからコーヒーを一飲み。

彼女はなにがなんなのか分からなかった。

「……」

「声は出るかの？」

声？

彼女は首を傾げた。

声は、どうだったかな……

「あ……」

「声は出るようじゃの。安心したわい」

朗らかに微笑を称える老人。

この老人は誰なんだろう。

「な、……まえ、は、なんです、か」

絞り出す様に紡いだその声を、老人はちやんと聞き取ったようだ。見た目に合わず、聴覚は良いのか、と彼女は思った。

「わしとしたことが自己紹介を忘れとった！

わしはアルバス・ダンブルドアじゃ。

アルバスと読んでくれると嬉しいのお」

そしてまた、朗らかにほっほっほっ、と笑うダンブルドア。

咄嗟に彼女は自己紹介をしようとした。

だが、声が出なかった。

いや、彼女は自分の名前を知らなかった。

「お主の名はメイレー・シックザールじゃ。メイレー・シックザール」

言い聞かせる様に2度繰り返し言うアルバス。

「あ、りがとう、アルバス」

まだ震える声で彼女——メイレーは言った。

「いいや、礼にも及ばんぞ」

ニコリと笑い、茶目つ気タップリにウイंकをするダンプルドア。メイレーはどう対応すれば良いのか分からず……困ってしまった。そんなメイレーを見て、アルバスはすまんの、とまた笑った。

「おお、そうじゃ。お主に引き合わせたい人物がおるんじやった」

ちよつとここで待つておれ、とダンプルドアは言い、その場を去る。

メイレーはとりあえず周りを見渡してみた。

なにもしていないのに湯気をあげるヤカン、なぜか走り回る列車。

周りには無数の本と、本棚の上には動く肖像画に、ボロ帽子。

なにやらかくさん置いてある机の横には、大きな壺の様な物。
反対側には燃え上がるような赤色の不死鳥がいた。

見れば見るほど不思議な部屋だ。

ここで暮らすアルバスはどんな事をしているんだろう……と無意識にメイレーは
思った。

「メイレー」

後ろからダンブルドアの声がした。

メイレーは後ろを振り返る。

ダンブルドアの後ろには、全身真っ黒の鉤鼻の男がいた。

「メイレー、これはセルブス・スネイプじゃ。

後々お主に教鞭を振るうこととなる人じやよ」

「よ、ろしく、おねが、いします」

震え声でスネイプに挨拶をする。

「よろしく。」

対してスネイプの対応は素っ気なかった。

「おお、セルプス。無愛想になる必要もないんじやよ」

「いえ、我輩はメイレーに近付いてはなりませんので」

「なぜじゃ……ああ、そうじゃったな。」

どこか納得した口調でダンブルドアは言う。

話についていけないメイレーは、困惑していた。

「すまぬのメイレー。」

こういふとダンブルドアはメイレーに向き合つた。

何事か、とメイレーは身構える。

「メイレー、お主は次の日、セルブスと共にホグワーツへ入学するための準備をしてもらおう」

安心せい、セルブスは良い奴じゃ、とコツソリ耳打ちしてくるダンブルドア。

いや、不安なんて持っていない。

逆にメイレーは安堵感を覚えるくらいだった。

チラツとスネイプを盗み見る。

——やっぱり安心する。